

2009年10月24日（土）～27日（火）

中国四川大地震パンダタオルプロジェクト 第3回現地訪問 報告書



光明村のお祭りに参加（北川県香泉郷光明村にて）

主催：特定非営利活動法人レスキューストックヤード

共催：NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）

協力：CODE 海外災害援助市民センター／株式会社ラッシュジャパン

[事務局・問い合わせ先]

中国四川大地震パンダタオルプロジェクト事務局（特定非営利活動法人レスキューストックヤード内）

〒461-0001 名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階 / 電話 052-253-7550 / FAX : 052-253-7552

E-mail : info@rsy-nagoya.com HP : <http://rsy-nagoya.com/>

【訪問の目的】

1. 復興の現状把握
2. 3月の交流会に向けての顔つなぎと関係づくり
3. 3月の交流会を兼ねての視察

【スケジュール】

日程	内容
10月24日(土)	中部国際空港→成都（上海経由）へ移動、宿泊 CODE 海外災害援助市民センターの吉椿雅道さんより現状報告、オリエンテーション 宿泊：Sim's cozy Garden Hostel
10月25日(日)	午前：案県北川県城見学 午後：北川県香泉郷光明村にて、祭りのリハーサル 前夜祭（キャンプファイヤーを囲んでのダンス） 宿泊：ホームステイ（光明村にて）
10月26日(月)	2009年中日友好北川光明村の祭りの開催 浴衣で「炭坑節」を披露。光明村の方と一緒に「炭坑節」を踊る。昼は光明村の皆さんと昼食。パンダタオル、熊猫通信、ラッシュジャパンの石鹸を贈呈。最後に日本人全員で「世界に一つだけの花（SMAP）」を合唱
10月27日(火)	成都→中部国際空港（上海経由）

【参加者】

- ・RSY スタッフ：関口威人
- ・ボランティア：椿佳代、後藤茂元、清水紀子、鈴木ひさ子
浦野恵理（愛知大学）、伊藤聖也（愛知大学）、村瀬晴香（愛知大学）

【協力者】

- ・CODE 海外災害援助市民センター：現地コーディネート・通訳
- ・財団法人名古屋国際センター：メッセージカード中国語翻訳
- ・パンダタオルプロジェクトボランティア：熊猫通信の中国語翻訳、パンダタオルの制作

【贈呈した品】

- ・パンダタオル約450個 熊猫通信450通 ラッシュジャパンの石鹸190個

【今後の予定】

- ・来年3月：減災の知恵と体験の交換「減災交流ワークショップ」・「第6回現地報告会」の開催
- ※月2回～3回のRSYボラデー「パンダタオル手作り教室」開催・パンダ通信の発行は継続します。

※減災交流ワークショップとは？「パンダタオル」を介して得た繋がりを単なる心の交流にとどめるのではなく、次の災害に生かせる減災対策に結び付けたいと考えています。被災経験のある四川の方々から、体験談を聞かせて頂き、その心情に寄り添うと共に、災害時に役立つ日本の知恵を四川の方々へ提供する場『減災交流ワークショップ』を実施したいと考えています。減災対策は日本でも中国での急務の課題であり、『知恵と体験の交換』を通じて、日中両国における減災対策を進めていくことができると考えています。

今後のパンダタオル手作り教室の開催、「パンダタオル」「パンダ通信」の配布、3月の減災交流ワークショッププログラムの実施、その後の現地活動報告会の実施は、『株式会社ラッシュジャパン「LUSHチャリティバンク」助成金事業』として実施します。

[現地報告]

10月25日(日)

○安県北川县城の見学



慰霊碑を前に手を合わせるメンバー



2008年5月12日から変らない風景

○北川県香泉郷光明村にて、祭りのリハーサルの様子



民族衣装を着た子供たちの歌の披露



演劇の最終チェックに真剣な村の人たち

○北川県香泉郷光明村にて、前夜祭



キャンプファイヤーを囲んでの前夜際



子どもたちとの交流

○北川県香泉郷光明村にて、ホームステイ



たくさんの料理が並んだ夕食の風景

10月26日(月)

○北川県香泉郷光明村にて、お祭りの当日



雨の中、みんなで炭坑節を踊りました



子どもたちが一生懸命取り組みました



当方の紹介、皆さんへの思いを伝えました



子どもたちの笑顔をたくさん見ることができました

○北川県香泉郷光明村にて、パンダタオル、ラッシュジャパンのソープの贈呈

「パンダタオル」と「ラッシュジャパンのソープ」を贈呈しました



「ラッシュジャパンのソープ」を手にとる子どもたち

ラッシュジャパンのソープを見せると、たくさん子どもたちが集まってきました。「これ食べられるの？」
「いろんなにおいがするね」などと興味津々でした。

大人たちの中で、「洗濯には使えるの？」と聞く女性もいました。また男性の方で、「若い女の子が使うものでしょ」と遠巻きに見られる方もいましたが、みなさん石鹸に関心を持たれていました。石鹸を受け取った子どもたちは、「ありがとう」と笑顔を見せていました。

【被災地の現状を見て】

今回の訪問は、復興の進展が感じられました。1年前には仮設住宅に多くの住民が暮らし、至る所に煉瓦が積み上げられていた光明村では真新しい家が完成し、大型テレビなどの家財道具もそろっていました。村のある組長さんからは「あなたたち日本人のおかげでこんなに早く家が再建できた」と感謝の声を掛けられました。一方で、街全体が廃墟となった北川県城は封鎖状態が続いており、周囲にはいまだに瓦礫を片付けている人の姿がありました。1年前に十数個のパンダタオルを配った子どもたちの姿はこのときは見られませんでした。大人たちに当時の写真を見せながら聞くと「小学校は再開しているのでそこに通っていると思う。どこに住んでいるかはわからないが、新しい街ができたならみんなそこに移ってくるのではないかと」言われました。バラバラになったコミュニティーは元に戻せるのでしょうか。復興には、まだまだ多くの課題があると感じました。



たくさんの笑顔に出会えた訪問でした

光明村は人口 726 人（193 戸）で地区が 1~5 組に区分されている。191 戸のほとんどが被害を受け、143 戸が要再建、その他は要補修。死者 6 名。普段は若手が出稼ぎに出ているため、高齢者と子ども（小学生以下）の姿が目立つ。CODE が主に支援している 4~5 組では、従来工法による耐震性の強い木造家屋で建設をしている。今は再建が終わったところもあり、ほっと一息ついている方もいる。今回の訪問では、3 月の交流に向けての顔つなぎとして、訪問したメンバーは住民の皆さんと心の交流をすることができた。

【参加者の感想】

- ・光明村の子どもたちと触れ合い、中国語で「姉ちゃん」って呼んでくれたことが嬉しかったです（20 代女）。
- ・お別れのときに「今度はいつ来るの？」と言ってくれました。この言葉がとても印象に残っています（20 代女）。
- ・被災してから約 1 年半が経過していることもあり、生活の再建も大分進んでいるように思いました。被災しなければ、光明村に多くの日本人が訪れることはないだろうと考えると、複雑な気持ちになりました（20 代女）。
- ・光明村を訪れて、「地域のコミュニティ」の大切さを感じました。彼らの団結力をさまざまな面で見ることができました。「みんなで頑張る」ことが、被災地復興に大きな力を与えるのではないかと思いました（40 代女）。

【おわりに】

今回で、現地訪問は 3 回目となります。また日本で行う「現地報告会」は 5 回目を迎えました。報告会は、会を重ねることに参加者が減少しています。日本で報道が少なくなる中で、被災した地域は、復興へ向けて頑張っています。しかし、被災した地域は、1~2 年で復興はできません。私たちは、地道に長く続けていける支援を目指していきたいと思います。今年の 9 月に静岡県駿東郡清水町立南中学校でパンダオール手づくり教室を行いました。小さなかけ橋が大きく実を結ぶことを考えると、このような地道な活動は非常に大切だと感じています。また、株式会社ラッシュジャパンの支援をいただき、今回の訪問が実現したことに心から感謝しています。訪問したメンバーは、現地の方と強い絆を結ぶことができました。今回の訪問で、現地の方と顔の見える関係ができ、来年 3 月に予定している交流会では、中国四川大地震から学び、今後の中国と日本の知恵の交換につなげていきたいと思っています。